

「信じることと行うこと」(ルカによる福音書六章四三〜四九節)

1 信仰と生活

今日の箇所は、イエスの「平地の説教」(六・二〇〜四九)の結びの部分に当たります。

結びの部分と申しましたが、ここからが結びです、と書いてあるわけではありません。区分はともむずかしいのですが、ここに来て、二つの言葉の対比が目立ってきたというのが、私がそう考える一つの理由です。

例えば、「良い木」と「悪い木」(四三節)、「善い人」と「悪い人」(四五節)、さらに「わたしの言葉を聞き、それを行う人」(四七節)と「聞いても行わない者」(四九節)です。

こうした対比的な言葉によって、私どもはすぐに、平地の説教の始まりのところを思い起こします。そこにすでに、「幸いである」と「不幸である」という大きな対比がありました。

その対比が今日の箇所に戻ってきます。しかしたんに戻ってきただけではありません。そのどちらを選ぶのか、イエスの話を聞いている人が選択を迫られる、そのような形で戻ってきます。幸いな人もいる、わざわいな人もいる、その確認を求められているわけではありません。そうではなくて、あれかこれか、君はどっちだ、決断の前に立たせられます。それはまるで、ふるいにでもかけるような厳しい結びです。それが平地の説教の結びです。

もちろんイエスの説教がいつもこうした厳しい要求、問いかけで終わっているというわけではありません。例えば、ガリラヤの会堂でのイエスの最初の説教、それを思い起こしていただければよいと思います。宣教を開始したばかり、彼自身何者かまだよく知られていない。その中で人々はイエスの「恵み深い言葉」(四・二二)に驚いたと書いてあります。イエスの説教、その言葉は、そのとき、これを聞いた人々を、福音の恵みの中に包み込んだのです。

これに対して、平地の説教がなぜこうした厳しい結びとなっているのか、それはここ何回か申し上げているように、新たに共同体として歩み始めた弟子たちに語られているからです(六・一二以下)。弟子たちはすでに使徒という呼び名ももらっています。彼らは、イエスから宣教へと遣わされます。それだけではない。将来、イエスが地上の生涯を終えた後も、その働きを引き継いで、教会を形成し、神の国の宣教をになっていくのです。イエスを主として信じ、従っていく彼らは、どのような規律のもとで歩んでいくべきか、どのような共同体を形成していくべきか、真の弟子の在り方を明らかにしたのが平地の説教でした。そのための決心が問われます。それがこの説教の結びを厳しいものとしているのです。

ところで先週取り上げた箇所に「イエスはまた、たとえを話された」(三九節)という言葉があり、そのとき私は「盲人が盲人の道案内をすることができようか」に関連させ、「たとえ」というより「ことわざ」をイエスは取り上げ、それに託して語っていると、申し上げました。しかし今日の箇所を見ると、「イエスはたとえを話され

た」というあの言葉はつづいている、ここまで、平地の説教の最後までつづいていると受けとることができます。まず最初の比喻です。

悪い実を結ぶ良い木はなく、また、良い実を結ぶ悪い木はない。木は、それぞれ、その結ぶ実によって分かる。茨からいちじくは採れないし、野ばらからぶどうは集められない（四三〜四四節）。

この数行の言葉の考え方の中心は、「木は・・・実によって分かる」、ここにあるように思います。それを信仰にあてはめれば、彼の言葉はただけだが、心は信仰に満ちているとか、彼の行いは別として、信仰はあるとか、こうした抽象論は、自分についても、他人についても、成り立たないということです。それは聖書の考えでもイエスの考えでもありません。

「木は・・・実によって分かる」のです。ここで「実」とは、私どもの生活とか行いのことです。木は実によって分かる、厳しい言葉です。この言葉を前に自分を省み、おののかない人、不安にかられない人は、だれもいないのではないでしようか。

しかし私どもは、ここから、私どもを萎縮させてしまう律法の言葉を聞き取るべきではありません。むしろこれは福音です。木は「時がくると」（詩編一・二、口語訳）実を結ぶのです。実を結ばないように努力することが無意味なように、実を結ぶように人為的に「助長」するのもおろかなことです。私どもは信じて待つ、自分を待つことができる、それが許されるのです。

「木は・・・実によって分かる」。これは、他人（ひと）との関係においても福音です。私どもは早まって他人を判断しないでいいからです。やがてつけた実が、あるいは実をつけなかったことが、その人の本質を示します。その時まで私どもは信頼しつづけるべきですし、信頼していいのです。ですから私どもは、他人をも待つことができるし、それが許されるのです。兄弟の目にあるおが屑を、早まって取りに行こうとしたりしないでいい（六・四一〜四二、参照）。弟子たちはそれぞれ自らの信仰と生活の良い関係の中で歩むことを期待されています。

2 言葉の問題

もう一つ比喻があります。

善い人は良いものを入れた心の倉から良いものを出し、悪い人は悪いものを入れた倉から悪いものを出す。人の口は、心からあふれることを語るのである（四五節）。

この聖句（四五節）は、いま私どもが取り上げた、木とその結ぶ実の関係についての四三〜四四節と直接関連させることもできますが、私は切り離して、独立させて読んでみたいと思います。

先ほど、「木は・・・実によって分かる」といったときの「実」を、私どもの生活や行いと理解しておきました。しかし言葉も「実」の一つであることは間違いあり

ません。ですからここで問題は「信仰と言葉」です。木は、実、つまり言葉によって分かるのです。言葉は冷たく刺すようだけれど、信仰は深い、などというのも聖書と無縁な、イエスと無縁な抽象論です。

この聖句が第一に私どもに明らかにしているのは、言葉は「心」から来る、ということですが。

この当たり前のことを聖書は明確にしていますが、私どもはそうは考えていないところがあるのではないのでしょうか。つまり、言葉と心は別だと、考えているところがあるのです。

ということとは、私どもは言葉をあやつることができるということでしょうか。一つの心の中に「良い」言葉と「悪い」言葉とがあつて、その中から自分が選んで、取り出し、言葉に出す、というように。仮にだれかに対して心何か悪い思いをいだいていたとして、それを隠して、良い言葉を口にすることができると。しかしイエスがいうように、私どもにそれはできないのです。つまり心からあふれ出ることを、それを口は語ります。それを止めることは、口にはもちろん、私どもの頭にも、理性にもできません。

全部とはいいません。しかし私ども人間において問題は、ほとんどが言葉に絡んでいるものです。その状況は、近年ますます悪くなって、じつは私どももそれからめとられているのです。聖書は、至るところで、言葉と悪の問題に触れて、警告を發しています。その中から一つだけ、イエスはフアリサイ派との論争の中でこういっています。

口から出て来るものは、心から出て来るのである。これこそ人を汚す。悪意、殺意、姦淫、みだらな行い、盗み、偽証、悪口などは、心から出て来るからである。これが人を汚す（マタイ一五・一八〜二〇）。

問題は「心」です。このマタイの箇所でも、今日のルカでも、心と訳されているのは、他のところでは「心の深み」「心の底」などとも訳されている言葉です。それはたんに表面的な、私どもの意識のコントロール下にあるものではありません。人の行いも言葉もそこから生まれるところ、意識も無意識も包み込んでいる人格の中心といったらよいでしょうか。それが心です。そこが罪に汚されています。人はそこから自由になれない。人は罪人だからです。

しかし聖書は、神はこの心において私ども働きかけ、私どもと共におられるといっています。言い換えれば、聖霊がこの心の深みに注がれるといっています。「わたしはお前たちに新しい心を与え、お前たちの中に新しい霊を置く」とは預言者エゼキエルの言葉です（三六・二六）。私どもはイエス・キリストにあつて「心の底から新たにされる」（エフェソ四・二三〜二四）以外にない。新たにされた心をもってイエスに従うこと、それが平地の説教で求められていることです。

3 信仰と行為

さて今日の三つ目のイエスの教え、たとえによる教えです。たとえも比喻です。た

だし物語として語られる比喩です。やはり比喩ですので、ポイントだけ逃さないようにすればよいと思います。この「家と土台」のたとえは、マタイの山上の説教でも最後を飾っています。非常に有名な、分かりやすいたとえです。

わたしを「主よ、主よ」と呼びながら、なぜわたしの言うことを行わないのか。わたしのもとに来て、わたしの言葉を聞き、それを行う人が皆、どんな人に似ているか示そう。それは、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を置いて家を建てた人に似ている。洪水になって川の水がその家に押し寄せたが、しっかり建ててあったので、揺り動かすことができなかった。しかし、聞いても行わない者は、土台なしで地面に家を建てた人に似ている。川の水が押し寄せると、家はたちまち倒れ、その壊れ方はひどかった（四六〜四九）。

ここに「似ている」という言葉が二回（四七、四九節）出て来ます。何が何に「似ている」のかといえば、「主よ、主よ」と呼びながら、イエスの言うことを行わない人が、土台なしに家を建てた人に、イエスの言うことを行う人は、岩を土台として家を建てた人に「似ている」といわれています。ですから、似ているという言葉で、現実とたとえがつながっています。

地面を深く掘り下げ、岩を土台として建てられた家、土台もなしに地面に直接建てられた家、マタイでは砂地に家を建てたとなっていて、これがあぶないことは、分からない人はいません。でもなぜそんなことをしてしまうのでしょうか。それは分かるような、分からないような、いずれにしても問題は、早晚、その家は倒れてしまうということ、天気のとときは、普通のとときは、いいのです。じっさい家の土台まではみえません。しかしいつたん嵐になると、たちまちにして、倒れてしまう。しかもその壊れ方はひどいのです。

イエスは、要するに、イエスを信じることと行うこと、つまりイエスに従うことの重要性を語っているのです。

ただここでは、一般的に、行いは大事だ、従うことは大事だといっているのではないと思います。平地の説教のここはまとめとして、結びとして、あれかこれかの決断を迫っている箇所として、ここまで語ってきたことを思い起こすようにといわれています。

敵を愛すること、善を行うこと、与えること、そして人を裁かず、まずは自分の目の中の丸太を取り除くこと、悔い改めること、等々です。この線に立って君たちは歩もうとしているのか。それとも仲間内だけで愛することをし、奪われたら取り返そうとし、返してもらったことをあてに貸したり、人を赦さず、自分の目の中の丸太は見ない、そうした偽善者として歩むのか、それが問われています。

ディートリヒ・ボンヘッファー（1906-1945）の言葉で、よく知られた、私もいつも思い起こす言葉の一つに、信じる者のみが従い、従う者のみが信じる、という言葉があります（『キリストに従う』）。従うということのない信仰は安価な、安っぽい恵みの理解です。かくてイエスを信じ従う弟子たちは、イエスの昇天後、主の証人として、イエスの働きをなう者たちとして、自らの命をかけて歩み、教会の基礎を作り上げるようになったのです。

（二〇二一・六・二〇）